

中小企業はブラックか、

という問い合わせNINETYの年
度の講義「中小企業を学ぶ」
は始まった。この問い合わせに對
するレポートでは、中小企
業にネガティブな印象を持
つ学生が多く、その理由も
バイアスがかかっていると
思われた。

本講義は、愛知中小企業
家同友会の協力を得て、同
会から池内秀樹氏と4人の
経営者（明石耕作氏、城所
喜男氏、水野清香氏、溝口
博己氏）、そして小職を含
めた6人で2015年度か

んのない意見交換が行わ
れた。今回はその際のコス
トから「講義を通じた経
験者の学び」を紹介した
い。

中小企業について正しい
情報をお伝えねばどうすれ
ばよいのか。講義すること
は、登壇者が自身が学生から
問われることを意味する。
そして経営者は日々、従業
員からも問われている。こ
れは経営者にとって、会社
の信用問題につながる。問
われることに耐えられる自分
であるために、猛勉強して
登壇する。これが池内氏の
コメントであった。

続いて明石氏は、企業は
「環境適応業」である。環
境適応力を恐竜と「キブリ
コメント」として、「社員を手段として
役立つ人材という講義の際
には、「社員を手段として
見ていなくてはならないか」、自
問自答する機会になつたと
コメントしている。

溝口氏は、自身の登壇の
際には、自社の内容をよく
理解していない受講者に対
し、「ドメイン、ビジネス
モデル」をどう伝えるのか
を考える機会となつた。社
員の登壇の際には、あえて
細かな打ち合わせをしなか
つた。その結果、若い社員
が自身の経験から、働くこ
との魅力をパワーポイント
に作り込み、プレゼンも予
想以上の出来で、従業員の
成長を知る機会をいただい
た、とのことであった。

座談会の締めくくりに城
所氏から、大企業に比べ中
小企業は、自己表現をする
機会は少なく、地道に発信
するしかない。こうした中
で学生に対して発信できる
機会は貴重である、という
ものであった。

本講義が受講者だけでは
なく、経営者の方々にも少し
は貢献できたことがわか
り、胸をなで下ろしている。

2021年度までのメンバー
で充実した「学び」を続
けたい。

講義を通じた 経営者の学び

ら開講している。6年目を
迎え、講義をするのによ
る登壇者自身の学びについ
て伺おうと全講義終了後に
座談会を行い、忌憚（きた
き）て登壇（きとう）した。

6年目を迎えた講義は、
これまでの登壇者自身の学
びについて、何を学んだか、
何を実感したか、などと、
登壇者自身が語る形で、
登壇者自身の学びを聞き取
れる形式で構成される。



愛知淑徳大学
ビジネス学部教授

浅井 敬一朗

あさい・けいいちろう
技術。
生産管理。広島大学大学院国際協
力研究科博士課程修了。博士（学
術）。1967年生まれ。

なつたという。
きているかを考える機会に
本講義が受講者だけでは
なく、経営者の方々にも少し
は貢献できたことがわか
り、胸をなで下ろしている。
2021年度までのメンバー
で充実した「学び」を続
けたい。

「中小企業を学ぶ」座談会から

「社員であればこのくらい
は言わなくてもわかるだろ
う」という姿勢から、自分
が考えていることを「丁寧
にわかりやすく話す」きっ
かけになつたという。

水野氏は、自社の経営に
ついて、学生自縛で理解し
てもらえるように講義内容
をもう一度整理しながらお
話を始めた。

役立つ人材という講義の際
には、「社員を手段として
見ていなくてはならないか」、自
問自答する機会になつたと
コメントしている。

溝口氏は、自身の登壇の
際には、自社の内容をよく
理解していない受講者に対
し、「ドメイン、ビジネス
モデル」をどう伝えるのか
を考える機会となつた。社
員の登壇の際には、あえて
細かな打ち合わせをしなか
つた。その結果、若い社員
が自身の経験から、働くこ
との魅力をパワーポイント
に作り込み、プレゼンも予
想以上の出来で、従業員の
成長を知る機会をいただい
た、とのことであった。

座談会の締めくくりに城
所氏から、大企業に比べ中
小企業は、自己表現をする
機会は少なく、地道に発信
するしかない。こうした中
で学生に対して発信できる
機会は貴重である、という
ものであった。

本講義が受講者だけでは
なく、経営者の方々にも少し
は貢献できたことがわか
り、胸をなで下ろしている。

2021年度までのメンバー
で充実した「学び」を続
けたい。